

【感動】 コロナ禍で過ごした1年。感じていることを書きます。

コロナ禍のために学校でも当たり前になっていたことが当たり前できなくなって、子どもたちにとっては、よく言えば落ち着いた日々が送れる状況ではありますが、裏を返せば、**波風立たず、あまり感情の変化を表出しづらい毎日**となっている気がするのです。もう少し具体的に言うと、例えば音楽会で大きな声で歌って「**気持ちいい**」とか、運動会のかけっこで〇〇さんに負けて「**くやしい**」とか、休み時間大汗かいて友だちと飛び回って「**楽しい**」とか、友だちとけんかして**大泣きする**とか。なんか、そんな**心が揺れる機会が断然少なくなっているな**あって思います。

あと、私自身が一番危惧しているのは、私自身がそんな毎日に慣れてしまい、むしろ、このように心の動きが伴った感情的な行為をあまり望まない自分になりつつあるのではないかということなのです。

泣いている子どもをみると、「まずいなあ」と思ったり、大声で笑っている姿をみて「う～ん」って思ったり……。コロナ禍で大きな声で話したり、マスクをしているので小さな声でささやいたり、そんなことにも制限があるがゆえ、このような感情の露呈に嫌悪感を持っている自分に危機感を感じているのです。

もっと笑っていいんです。もっと、泣いていいんです。

もっと、喜んでいいんです。もっと、もっと……。

こんな時だからこそ、子どもたちの心を揺らし、感動をともなう営みを追い求めていかなければいけないあと、この頃強く思うのです。



しかし！！ こんなエピソードも（Aさんの日記から）

先週から、本校では学習発表会を学年ごと体育館で行っています。この発表の中で、春にできなかった音楽会の代わりに音楽的なものを発表することになっていました。

4年生の発表の日。Aさんは具合が悪くてお休みをすることになってしまいました。今までがんばって練習をしてきたことをお母さんに見せる機会がなくなってしまったのでした。しかし、その日。欠席のために荷物を取りに学校へ来た母親にリコーダーを持ってくるよう頼んだAさん。具合もよくなった夜に母親に向けて発表するはずだった合奏「千本桜」と、合唱「どんときも」をお母さんの前で披露したそうです。もちろん、お母さんは大感激だったことでしょう。そして、その日記を読んだ担任も熱いものがこみ上げてきたそうです。

子どもは失っていないのです。 心揺れる思いを。

そして、素晴らしいことに、こうやって殺伐とした我々大人にも、まっすぐに伝えてくれるのです。

「こんな時だからこそ、いつも以上に『笑顔や感動が溢れる学校』をめざしていきたい」

1年のまとめの時期。そして、来年度へ向けて。今を生きる子どもたちからのメッセージを受け取った気がします。